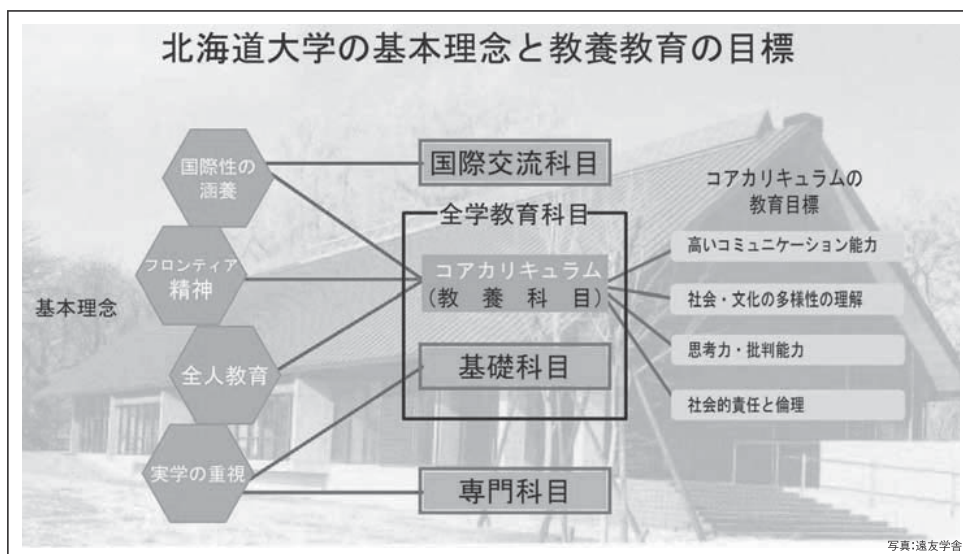


## 参考資料① 北海道大学の基本理念と教育目標



北海道大学は、札幌農学校以来130年を超える歴史のなかで、

- ①フロンティア精神、
- ②国際性の涵養、
- ③全人教育、
- ④実学の重視

を基本理念として掲げ、自由・自主独立を重んじる学風を培ってきた。

また、優れた総合的判断力や高い見識を備え、専門的知識を広い視野のもとで活用できる人材の育成を目指して、21世紀の大学の教育の目標として「21世紀の開拓者は、

- ①高いコミュニケーション能力を持ち、
- ②社会や文化の多様性を理解し、
- ③独創的な思考力と建設的な批判能力を持ち、
- ④社会的な責任と倫理を自覚する

ものでなければならない」ことを掲げている。(平成12年度未来戦略検討WG最終報告「新世紀における北海道大学像」2001)

### 北海道大学の基本理念と長期目標

北海道大学は、大学院に重点を置く基幹総合大学であり、その起源は、日本最初の近代的大学として1876年に設立された札幌農学校に遡る。爾来、帝国大学を経て新制大学に至る長い歴史のなかで、本学は、「フロンティア精神」、「国際性の涵養」、「全人教育」及び「実学の重視」という教育研究に関わる基本理念を掲げ、培ってきた。

社会の要請に応じて国立大学法人としての歩み始めるにあたって、北海道大学は、これらの基本理念を再確認するとともに、社会に対する説明責任を認識しつつ、新たに獲得した自由の中で、新世紀における知の創成、伝承、実証の拠点として発展するための長期的な目標を、以下のように定めるものである。

#### ◆第1 フロンティア精神

フロンティア精神とは、学生及び教職員がそれぞれの時代の課題を引き受け、敢然として新しい道を切り拓いていくべきとする理想主義を意味する。札幌農学校の開校式にあたってクラーク博士が唱えた“lofty ambition”（高邁なる大志）という言辞を端緒として、世紀を超えて北海道大学を揺るぎなく支えてきた基本理念である。

21世紀に至り、学問におけるパラダイム転換や新たに提起される人類的課題に答え得る研究を不断に展開することが、現代におけるフロンティア精神の発現である。北海道大学は、学問の自由を基礎に、純理と応用の別を問わない創造性豊かな研究を推進するとともに、大学院組織等の柔軟な展開を通じて研究教育機能を飛躍的に発展させることにより、人類史的課題に答え得る世界水準の研究の推進を目指す。

#### ◆第2 国際性の涵養

欧米の文化と科学技術を導入し、外国人教師の英語による授業を行った札幌農学校は、設立当初から多様な世界にその精神を開いていた。それ以来、多くの本学の卒業生が海外において活躍し、国際性の涵養という理念が、さまざまな形で受け継がれている。

教養教育の充実によって自文化の自覚に裏づけられた異文化理解能力を養い、外国語 コミュニケーション能力を高め、国際的に活躍できる人材を育成することの必要性はいうまでもない。北海道大学は、学生及び教職員の国際性を涵養し、国際社会の発展に寄与するため、海外留学・研修の機会を拡大するとともに、外国人研究者・留学生の受け入れを積極的に推進し、アジア・北方圏をはじめとする世界の人々との文化的・社会的交流の促進を目指す。

#### ◆第3 全人教育

札幌農学校は、農業専門家の養成に止まらず、豊かな人間性と高い知性を兼ね備え、広い教養を身につけた人間の育成を図った。このことは、内村鑑三、志賀重昂、新渡戸稲造、有島武郎など思想・文学をはじめ、人文社会分野における優れた人材を次々に輩出したことにも示されている。北海道大学における全人教育の理念は、今日に至るまで、専門的知識を活用するための総合的判断力と高い識見を備えた人材育成の基盤としての教養教育を重視する伝統として継承されている。

この理念をさらに発展させるために、北海道大学は、豊かな人間性と高い知性を涵養する幅広い人間教育を進め、自由・自主独立の精神の涵養と自律的個の確立を図るとともに、人権を尊重し、社会的要請に的確に対応しうる基盤的能力の育成を目指す。

#### ◆第4 実学の重視

実学の重視という理念は、札幌農学校が設立後の様々な苦難を乗り越えて総合大学へと発展する過程において二つの意味を含みつつ定着した。即ち現実世界と一体となった普遍的学問の創造としての研究と、基礎研究のみならず応用や実用化を重んじ研究成果の社会還元を重視するという意味である。北海道の広大な自然の中で行なわれた宮部金吾の植物の研究や中谷宇吉郎による雪の研究等は、身近な現象を芽として普遍的真理を創造した研究の精華であったし、北海道大学における研究の中には、北海道の産業とともに発展したものが少なくない。

北海道大学は、実学重視の理念の普遍的かつ今日的意義を追求し、現実世界と一体となった普遍的真理や、北海道の特性を生かした学問の創造を推進するとともに、産学官の連携協働の拡大を通じて、研究成果を北海道、さらに日本、世界に還元する。あわせて大学院における高度な専門家及び職業人の養成並びに社会人教育を充実することを目指す。

### 授業科目区分

#### 授業科目の種類及び内容

全学教育科目の授業科目の種類及び内容は、次の通りである。また、必修、選択科目に分かれており、授業内容は各学部で作成の「授業計画（シラバス）」に掲載されている。

北海道大学は、1876年創立の札幌農学校の伝統を受け継ぎ、教育・研究の基本理念として「フロンティア精神」「国際性の涵養」「全人教育」「実学の重視」を掲げている。全学教育の各科目もその理念を実現するために設定されている。

#### 教養科目

##### ◎＜一般教育演習（フレッシュマンセミナー）＞

初年次の学生を対象としたさまざまな主題を持つ少人数クラス（20名以内）の演習である。学生との意見交換、討論などの双方向的な授業によって、それぞれの関心、学修レベル、個性に応じた問題解決能力を育成する。自ら主体的に学ぶという大学にふさわしい学修態度への転換をはかる。受講者を文系・理系などに区分する必要はなく、むしろ、異なる専門分野を志向する学生間の討論を通して相互の理解を深めることが望ましい。

##### [論文指導]

「論文指導」は、日本語による論理的な表現能力と論文作成能力の向上を目的とし、論文の読解や観察に基づくレポートの作成を通じて積極的な学習態度の育成を目指すものでもある。「論文指導」は、独自に開講されるのではなく、「分野別科目」・「一般教育演習」の講義の一部をこれに充当し、学生によるレポートの作成と教官による添削のフィードバックを繰り返しながら授業を進めるところにその特色がある。

このため受講者は30人を限度とする。各学部の教育課程においては、「分野別科目」・「一般教育演習」の総単位の中で「論文指導」の単位を設定し、認定する。

##### ◎＜総合科目＞

複数の分野を融合する科目で、学部または分野を横断する科目群及び大学全体として企画する特別講義科目として、次の四科目から構成されている。

##### (1)「環境と人間」

人間はこれまでさまざまな活動によって自然を変え、自分たちに都合の良い環境を作り出してきた。

しかし人口の増加や産業の発展によって地球規模の環境変化が起こり、人々の生活に深刻な影響を与えるようになった。これからは、人間も地球の生物の一員であるという立場から、環境をモニターしながら人間の活動を制御する必要に迫られている。地球環境の保全、維持のための基本的な考え方、自然に関する知識、技術、法律、経済などを総合的に学ぶ。

##### (2)「健康と社会」

本科目では、現代社会における健康問題の本質を理解し、その成り立ちと対応のあり方を社会との関連でとらえ、健康な人生と社会の形成に主体的に取り組むことができる「健康主体」の育成に必要な基礎的・実践的知識の修得をめざす。

健康の科学は、本来、総合的の科学であり、医学、体育学分野だけでなく、他の自然科学、社会科学分野の協同による学際的な授業が構成・展開されることによって、所期の教育目標が達せられるものである。全ての学部・研究所など（部局）が参加できる科目であろう。

##### (3)「人間と文化」

文化は人間にとって第二の自然であると言われる。人間は、自然に働きかけ、さまざまなものを作り出してきただけではなく、自らの内面を探求し、他の人間とのかかわりの中で自らを理解しようともしてきた。自然を耕作することによってだけでなく、むしろ「魂の耕作」によってこそ、はじめて人間は人間となるのである。「人間と文化」は、こうした人間の営みの総体であり、人間集団の生活様式全体を意味する文化を、多様な学問的視点から分析し統合することによって、人間とは何かを問おうとするものである。

##### (4)「特別講義」

総合的な主題にもとづいて、総長、学部長、学外の学識経験者などが担当する特別に企画された授業。

## 参考資料③ 全学教育科目実施の手引より(抜粋)(2)

一般教育演習（フレッシュマンセミナー）、総合科目の開講にあたって

### ◎一般教育演習（フレッシュマンセミナー）

#### (1) 性格と役割

この演習を通じて、1年次の学生集団が従来の教科区分に拘束されない共通のテーマについて教官の指導の下に学修し討議する機会を持つことができる。学生がこのような機会を持つことにより、教官の学問への姿勢に触れ、また教官と学生、学生相互の人的ふれあいを通じて新入生が大学という新しい環境に早期に適応できるような条件をつくるのが、この演習のねらいである。また、このような演習に参加することにより、知的関心を触発し合い、大学生生活での方向づけが得られるように配慮する。

演習の内容と形式に関しては、学生が関心をもつ分野について、教官が専門家としてその分野の基本課題や展望を語り、それによって学生の進路についての動機づけが与えられるようなものでも、また教官の専門領域に限定されず、学生の将来における専門分野を超えた共通問題について考えをめぐらし討議するようなものでもよい。従って、輪講形式に限らず調査、実験、見学や、新たな教育実践を含む形態であってもよい。

#### (2) 企画・立案

高等教育機能開発総合センター長から各部局長に対し、開講科目の提案依頼を行う。なお、当該テーマに直接関連する学部・学科等がある場合には、提案者はそれらの担当者と連絡・協議のうえ計画をたてる。

- ① 対象学生：1年次の学生
- ② 開講時期：第1学期及び第2学期
- ③ 履修者数：原則として20名を超えない。なお、最大でも25名を限度に履修調整を行う。

### ◎総合科目

#### (1) 望ましい基準

- ① 「有意義性」：必要性、重要性を含め、講義の目的及び構成・内容に意義のあるもの。
- ② 「複合性」：特定の主題をめぐって、2つ以上の学問分野を融合したもの。あるいは複数の学問の境界領域に介入する問題を取りあげるもの。
- ③ 「発展性」：今後とも重要な問題として発展する可能性のあるもの。学生の関心・意欲を高め、学生の今後の勉学に刺激を与え参考になるもの。
- ④ 「独自性」：課題と構成のユニークなもの。単一科目（講義）の補講・延長講義・特許あるいは各論的展開（サブ・ディプリナリー化）とならないもの。

#### (2) 企画・立案

高等教育機能開発総合センター長から各部局長に対し、開講科目の提案依頼を行う。なお、当該テーマに直接関連する学部・学科等がある場合には、提案者はそれらの担当者と連絡・協議のうえ計画をたてる。

- ① 対象学生：主として1年次及び2年次の学生（学部によって異なる）
- ② 開講時期：1年次は第1学期及び第2学期。2年次は第1学期（学部によって異なる）
- ③ 受講学生数：原則として講義室の収容数に合わせて受講学生の人数制限を行う。
- ④ テーマの設定：テーマの設定は、総合科目の成否にかかわるきわめて重要なことであり、テーマが明確で具体的な方が、学生の学修意欲を高めることになるので、前掲「望ましい基準」を十分に斟酌のうえ工夫する。
- ⑤ 担当教員数：担当教員があまり多人数では読切り講義的となり、系統立った学修を困難とし、成績評価にも支障がおきるので、数名の担当教員で数回ずつ講義を行う程度とし、担当教員が多数の場合には提案責任者が毎回出席して、各講義間の関連や全体の中での位置付けについて解説・補足するなどの配慮が必要となる。

#### (3) 担当教員の連携、講義の一貫性

担当教員が多人数の場合、ともすれば総合講義でなく“集合講義”となり易い傾向がある。従って、テ

マの設定とそれに基づく担当教員相互の連絡・打合せによる調整が重要である。そのためには、担当教員の間で討議を繰り返す必要があり、中には提案責任者が毎回授業に出席して講義全体の効果をあげる配慮をしている例がある。

(4) 内容と方法

毎年、同一テーマの講義をくり返す場合には、講義内容のマンネリ化を避けるために、講義テーマ・提案責任者・担当教員・実施方法等について検討を加えるとともに、学生の自主的学習意欲を喚起するように務める。

(5) 講義録・プリント等

学生の一般的レベルから、その知的関心や知識が必ずしも十分とは言えず、特に第1学期の段階ではその傾向がある。できるだけ講義録や講義のレジュメ・プリント資料などを、提案責任者や各担当教員から配付する。第2学期においても同様の配慮をする。

(6) 成績評価・単位認定

評価方法については、試験の実施、レポートの提出などは、担当教員の工夫に任されている。講義そのものの性格上、出席がきわめて重要なので、できるだけ出欠をとる。

注) 毎週1コマの授業が15週で、一般教育演習は2単位、総合科目は1単位。

## 全学教育科目の成績評価基準のガイドライン

成績評価基準に関して、単純に出席を点数化して加算することは、外部評価等においても、厳格な成績評価を実現するうえで問題があると指摘されておりますので、成績評価基準の設定、シラバスへの記載に際しては、この点に留意願います。

シラバスの入力にあたっては、「授業の目標」及び「到達目標」をできる限り詳細に記載するとともにこのガイドラインにそって「評価の基準と方法」欄に成績評価基準を明記するようお願いします。

なお、ガイドラインの内容について不明の点は各科目責任者にお問い合わせ願います。

### 一般教育演習 (フレッシュマンセミナー)

#### 1. 成績評価基準 (評価項目, 評価のポイント等)

担当教員が以下の評価項目から該当するものを選んでシラバスに記載する。各評価項目の評価割合 (%) を明示できる場合は割合を記載する。また、評価のポイントについて明示できる場合も、それらを記載する。

- 1) 出席及び学習態度
- 2) レポート内容
- 3) 討論への取り組み, 意見発表などの積極性
- 4) グループ作業への参加態度
- 5) 成果発表の内容と発表態度
- 6) その他 (適切な評価項目があれば追加する)

#### 2. 成績評価の判定

すべての講義題目について成績判定は合否ではなく、秀優良可の判定で行う。

秀優良可の割合は担当教員の判断によるが、成績分布に大きなばらつきが生じて学生に不公平感を与えないよう、前年度の成績分布の平均値を参考として、できるだけ平均値に近い割合で判定を行うこととする。要約すると以下の通りである。

- 1) 成績評価は合否ではなく、秀・優・良・可・不可の判定で行う。
- 2) 秀・優・良・可の割合 (%) は統一しないが前年度の成績評価の平均値を毎年担当教員に提示し、可能な限り平均値に近い割合で判定を行う。それによって、成績評価の公平性と信頼性を確保する。
- 3) 「出席」の評価項目は、不可とするか否かの判断のみに用い、秀・優・良・可の判定には用いない。

なお、平成 22 年度 1 学期に実施された「一般教育演習 (フレッシュマンセミナー)」(履修者数: 330 名)、「一般教育演習 (フレッシュマンセミナー) (論文指導)」(履修者数: 1029 名)の成績分布は以下の通りである。

一般教育演習 (フレッシュマンセミナー) 秀 16.4%, 優 63.3%, 良 12.7%, 可 2.4%, 不可 5.2%

一般教育演習 (フレッシュマンセミナー) (論文指導) 秀 22.8%, 優 43.3%, 良 23.1%, 可 6.1%, 不可 4.6%

#### 3. 各評価 (秀・優・良・可・不可) と 100 点方式との対応

「北海道大学学部における G P A 制度の取扱いに関する要項」第 2 条に定める成績の評価に対応する 100 点方式による評点は下記のとおりである。(平成 18 年 3 月 9 日開催 教務委員会了承)

秀: 90 以上, 優: 89 ~ 80, 良: 79 ~ 70, 可: 69 ~ 60, 不可: 59 以下

### 総合科目

#### ○「環境と人間」「特別講義」

- 1) 成績は、レポートを主体に評価するが、試験を課すこともある。成績は試験を課した場合はレポートと試験の総合点で評価する。
- 2) 絶対評価によるか相対評価によるかに関して。

受講者が 50 人を越える授業に関しては、相対評価を原則とし、秀及び優 30%, 良 50%, 可 20% 程度とする。但し、例外もありえる。

「秀」導入にあたっては 90 点以上と考えるのが基本で、「優」のうち優れた者を「秀」とし、「優」, 「秀」合わせて 30% とする。

備考：平成 22 年度第 1 学期の成績分布（科目別平均）

環境と人間： 秀 13.1%，優 28.3%，良 37.2%，可 11.1%，不可 10.3%

特別講義： 秀 11.7%，優 51.7%，良 17.5%，可 6.7%，不可 12.5%

## ○「健康と社会」

1) 成績は出席（授業への積極的参画）およびレポート（単回のみでなく、複数回の場合や、講義毎の場合もある。）による理解度、到達度を含めて総合的に評価するが、科目により期末試験を課す場合もある。ただし出席回数が規定に満たないもの、および単回レポートの場合のレポート未提出のものについては単位を認定しないことがある。（出席の規定回数は科目によって異なるのでシラバスおよび講義ガイダンスで確認のこと。）

2) 出席（授業への積極的参画）およびレポートの評価の配分割合は概ね 50/50 とする。（ただし科目によってはその配分比率が変わる科目もあるのでシラバスで確認すること。）

3) 受講生 30 人以上の科目にあっては、相対評価を原則とする。（絶対評価とする科目もあるので、シラバスで確認すること。）成績評価は、単位を認定されたもののうち（不可のものを除き）、概ね「秀＋優」30%、「良」50%、「可」20%とし、上位 10%を上限として積極的に「秀」評価を行う。30 人未満の科目については、履修状況と講義内容に応じて絶対評価を考慮する。

備考：平成 22 年度第 1 学期の成績分布（科目別平均）

健康と社会：秀 21.1%，優 29.0%，良 33.7%，可 8.0%，不可 8.1%

## ○「人間と文化」

成績評価基準のシラバスへの記載について、そのガイドラインを示します。およそこれに沿うかたちでシラバスの「評価の基準と方法」欄をご記入下さい。

次の各点について明記して下さい。

1. 出席状況を評価の対象とするか否か。

<記載例 1> 出席が 60% 以下の者には、試験の受験資格を（レポートの提出資格を）認めない。

<記載例 2> 本講義は、毎回の予習・復習の要求が極めて多く、また、原則として皆出席を要求する。

2. 主たる評価方法として、試験を実施するのかレポートを提出させるのかを明記する。そのうえで、いかなる点が評価のポイントになるのかも示すことが望ましい。

<記載例 1> 学期中に 2 回の小テストと学期末試験を行い、総合点で評価する。授業をどれだけ正確に理解しているかを、個別的知識・体系的理論・批判的応用力などのいくつかの観点から検証する。

<記載例 2> 5000 字のレポートを提出すること。設定した問題・テーマの重要性和斬新さ、それにアプローチする際の知識量、問題を解明する議論の論理性、議論全体の組織性と構成力などを多面的に評価する。

2-1. その他の評価要素があれば、それについても言及する。

<記載例 1> 平常点として、ディスカッションへの積極的参加と発言、毎回の小課題への取り組み方などを評価する。

<記載例 2> 授業への積極的な参加態度（35%）、中間レポート（25%）、期末試験（40%）によって行う。レポートでは学習意欲の深まりを、期末試験では基礎的学力を評価する。

<記載例 3> (i) 数回の質問票や、(ii) 授業への参加態度（予習や発言）、(iii) 期末レポートを総合して、到達目標の達成を評価する。それぞれの重みを機械的に決めることは出来ないが、一応、(i) が 10%の重み、(ii) が 30%、(iii) が残り 60%を目安とする。

3. 受講者数が 30 人未満であれば絶対評価で成績評価し、それを越えた場合は相対評価で成績評価する。またいずれの方式をとるのであれ、およその分布目安か過去の成績分布を明記する。

<記載例> 受講者数が 30 人未満であれば絶対評価で成績評価し、それを越えた場合は相対評価で成績評価する。絶対評価によった場合、過去 3（数値は任意）年間の分布は以下の通りである。

秀 5-0%、優 25-10%、良 40-25%、可 30-15%、不可 20-5%（数値は任意）

また、相対評価による場合は、成績分布は以下のとおりとする。

秀 5-0%、優 50-10%、良 65-25%、可 50-20%、不可 25-5%（数値は任意）

## ○「学問の世界」

レポートを担当教員が評価しその結果を各系の責任者がとりまとめ、秀・優・良可・不可の判定で行う。

## 参考資料⑤ 北海道大学大学院共通授業科目規程

(趣旨)

第1条 この規程は、北海道大学大学院通則(昭和29年海大達第3号)第21条の6第3項の規定に基づき、北海道大学大学院における共通授業科目に関し、必要な事項を定めるものとする。

(授業科目及び単位)

第2条 共通授業科目の授業科目及び単位は、別表のとおりとする。

(単位数の計算の基準)

第3条 各授業科目の単位数を定めるに当たっては、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により単位数を計算するものとする。

- (1) 講義及び演習については、15時間の授業をもって1単位とする。
- (2) 実験及び実習については、30時間の授業をもって1単位とする。
- (3) 講義及び実習の併用により行う場合については、前2号に規定する基準を考慮して総長が定める時間の授業をもって1単位とする。

(試験)

第4条 試験は、当該授業科目の授業が終了した学期末に行う。ただし、これによりがたい場合は、臨時に試験を行うことがある。

(成績)

第5条 授業科目の成績の評価は、秀、優、良、可及び不可とし、秀、優、良及び可を合格とする。

(教育課程の企画等)

第6条 共通授業科目に係る教育課程の企画及び実施は、北海道大学教務委員会(以下「教務委員会」という)が行う。

(雑則)

第7条 この規程に定めるもののほか、共通授業科目に関し必要な事項は、教務委員会が別に定める。



## (別 表)

授 業 科 目	単 位	授 業 科 目	単 位
生化学特別講義 I	2	トポロジー理工学特別講義 I	2
生化学特別講義 II	2	トポロジー理工学特別講義 II	2
分子イメージングの基礎から応用	2	ナノテクノロジー・ナノサイエンス概論 I	2
環境科学特別講義 I	2	ナノテクノロジー・ナノサイエンス概論 II	2
環境科学特別講義 II	2	あなたの研究を伝えよう	2
持続可能な低炭素社会	2	応用倫理	2
サステナビリティ学総論 I	2	性差研究入門	2
サステナビリティ学総論 II	2	スラブ・ユーラシア学 I	2
サステナビリティ学総論 III	2	境界研究 I	2
サステナビリティ学総論 IV	2	境界研究 II	2
サステナビリティ学総論 V	2	北方研究の最前線	2
サステナビリティ学総論 VI	2	情報学教育特論	2
サステナビリティ学総論 VII	2	MOT特別講義	2
アジア・アフリカ地域知・文化・言語論	1	「理系のための」知っておきたい特許制度	2
持続北海道モデル構築フィールド研修	2	理系・科学技術系大学院生の	
環境リーダーシップ論	1	ステップアップキャリア形成 I	1
新自然史科学特別講義	2	理系・科学技術系大学院生の	
南極学特別講義 I	2	ステップアップキャリア形成 II	1
南極学特別実習 I	2	高等理学教授法	2
南極学特別講義 II	2	将来の大学教員・研究職を目指す	
南極学特別実習 III	2	大学院生のための能力向上 (PFF) 講座	2
科学コミュニケーション	2	高度実践英語 I	2
科学技術コミュニケーションの基礎	1	高度実践英語 II	2
研究者のための映像制作技法	1	高度実践フランス語 I	2
実験社会科学入門	2	組織運営特論	2
宇宙惑星科学特別講義	2	食の安全・安心基盤学 I	2
廃棄物学特別講義	2	食の安全・安心基盤学 II	2
博物館学特別講義 I	2	食の安全・安心基盤学 III	2
博物館学特別講義 II	2	食の安全・安心基盤学 IV	2
博物館コミュニケーション特論	2	動物実験倫理特別講義	1
統計科学特別講義	1	人獣共通感染症の生態とその制御	2
計算科学の拓く世界	2		

**科目名：**

一般教育演習（フレッシュマンセミナー）

**講義題目：**

ムーミンの国へようこそ

**責任教員：**

池田 文人

**授業の目標：**

ムーミンはカバではありません！ムーミンたちはすべて、トーベ・ヤンソンが作り出した「いきもの」です。北欧に古くから伝わるサーガ（物語）に登場する妖精との類似が指摘されています。こうした北欧色が色濃く漂うムーミン物語を題材として、フィンランド人の自然観や人間観，人生観を学びます。これにより，自らがよりよく生きていくための指針を考えることが本授業の目標です。

しかし，なぜ今フィンランドなのでしょう？それは，とても小さく寒い国なのに，とても「熱い」国だからです。経済協力開発機構（OECD）が実施する15歳時の学力調査（PISA）で世界一を維持し続け，世界経済フォーラム（WEF）による国際競争力調査でも世界トップクラス。一方の日本はいずれも下降の一途。フィンランドと日本の明暗を分けているものはなんのでしょうか？ムーミン物語を通じて日本の将来と自分の生き方について考えていきましょう。

**到達目標：**

- ・物語のもつ構成，修辞，比喩，対話の四つの要素について説明できる
- ・ムーミン物語の個々の作品の四つの要素を的確に説明できる
- ・ムーミン物語全体の四つの要素を的確に説明できる
- ・よい質問がもつ，意図と背景という二つの条件について説明できる
- ・よい質問を実際につくることができる

**授業計画：**

以下の計画は本授業のガイドラインです。受講者の理解度等に応じて予定を変更する場合があります。

1 時間目

- ・『小さなトロールと大きな洪水』の解説を通じたムーミン物語の紹介
- ・授業内容と日程について
- ・成績評価の仕方について（質問に関するレクチャーを含む）

宿題：『小さなトロールと大きな洪水』について質問を挙げる

2 時間目

- ・『ムーミン谷の彗星』の解説（講義形式）

宿題：『ムーミン谷の彗星』について質問を挙げる

3 時間目

- ・『ムーミン谷の彗星』を読み解く（グループワーク）

宿題：『ムーミン谷の彗星』における物語の要素についてのレポート

4 時間目

- ・『楽しいムーミン一家』の解説（講義形式）

宿題：『楽しいムーミン一家』について質問を挙げる

5 時間目

- ・『楽しいムーミン一家』を読み解く（グループワーク）

宿題：『楽しいムーミン一家』における物語の要素についてのレポート

6 時間目

- ・『ムーミンパパの思い出』の解説（講義形式）

宿題：『ムーミンパパの思い出』について質問を挙げる

7 時間目

- ・『ムーミンパパの思い出』を読み解く（グループワーク）

宿題：『ムーミンパパの思い出』における物語の要素についてのレポート

8 時間目

- ・『ムーミン谷の夏まつり』の解説（講義形式）
- 宿題：『ムーミン谷の夏まつり』について質問を挙げる

9 時間目

- ・『ムーミン谷の夏まつり』を読み解く（グループワーク）
- 宿題：『ムーミン谷の夏まつり』における物語の要素について論じる

10 時間目

- ・『ムーミン谷の冬』の解説（講義形式）
- 宿題：『ムーミン谷の冬』について質問を挙げる

11 時間目

- ・『ムーミン谷の冬』を読み解く（グループワーク）
- 宿題：『ムーミン谷の冬』における物語の要素についてのレポート

12 時間目

- ・『ムーミンパパ、海へいく』の解説（講義形式）
- 宿題：『ムーミンパパ、海へいく』について質問を挙げる

13 時間目

- ・『ムーミンパパ、海へいく』を読み解く（グループワーク）
- 宿題：『ムーミンパパ、海へいく』における物語の要素についてのレポート

14 時間目

- ・『ムーミン谷の11月』の解説（講義形式）
- 宿題：『ムーミン谷の11月』について質問を挙げる

15 時間目

- ・『ムーミン谷の11月』を読み解く（グループワーク）
- 宿題：『ムーミン谷の11月』における物語の要素についてのレポート

16 時間目

- ・ムーミン物語全体を読み解く（グループワークと討論）
- 最終レポート課題：『ムーミン谷の仲間たち』の一話を解釈し論じる

**準備学習（予習・復習）等の内容と分量：**

- ・次の授業で扱う作品を読んでくる（単行本一冊程度を二週間で）
- ・授業で扱った作品についての質問を10個以降挙げ、電子メールで提出（隔週）
- ・授業で扱った作品についてのレポート（800字程度）を電子メールで提出（隔週）

**成績評価の基準と方法：**

- 隔週の質問（文章表現力＋独創性）：40%
- 隔週のレポート（文章表現力＋説得力）：40%
- 最終レポート（文章表現力＋説得力）：20%

**テキスト・教科書：**

以下のムーミン物語8冊を授業で使います。出版社は問いません。

たのしいムーミン一家、ムーミン谷の十一月、ムーミン谷の彗星、ムーミン谷の仲間たち、ムーミン谷の夏まつり、ムーミン谷の冬、ムーミンパパ海へいく、ムーミンパパの思い出

**科目名：**

一般教育演習(フレッシュマンセミナー)

**講義題目：**

海のフィールドに出ようⅠ

**担当教員：**

バウア・ジョン・リチャード

**授業の目標：**

北海道大学の理念および全学教育の教育理念を達成するために、北海道大学の附属施設を利用したフィールドでのグループ体験学習をとおして課題発見・問題解決型の自発的学習能力を養います。

北海道大学の理念：1) 開拓者精神(フロンティアスピリッツ)、2) 全人教育(人間性)、3) 実学、4) 国際性、5) 地域性。全学教育の教育理念：1) コミュニケーション能力を高める。2) 学問や社会の多様性を理解する。3) 独創的かつ批判的な考え方を身につける。4) 社会的な責任と倫理を理解する。

**到達目標：**

グループ単位で全員が授業計画に従って行動し、自然に触れながら学び、お互いにコミュニケーションをとりながら到達目標を達成する。

**到達目標：**

- 1) 各自が目標を持って積極的に行動し、グループ内やグループ間で自分の意見を他人に理解してもらう。
- 2) 他人の意見に耳を傾け良い点を見つける
- 3) 主題についてまとめたことを成果として発表する。
- 4) グループ全員で共同作業をして効果的な発表方法を考える。
- 5) 与えられた時間内で目的とする作業を終了できる。
- 6) 責任あるグループ行動ができる。

**授業計画：**

この演習は水産学部附属練習船「おしよる丸」や北方生物圏フィールド科学センター水圏ステーション、函館キャンパス等を利用する関係で9月に3泊4日の集中合宿で早朝から夜まで実施します。日程は次の予定です。最新の情報は集中講義掲示板を参照して下さい。

9月16日(日)：札幌から室蘭港に貸切バスで移動。室蘭港からおしよる丸に乗船して宿泊。おしよる丸での内容：ミニ講義、ローブワーク、イカ釣体験、海洋観測、プランクトン観察、海洋動物観測、トロール網による深海魚の採集等の体験学習をとおして自然を理解する。

9月17日(月)：おしよる丸で演習と宿泊。

9月18日(火)：函館港に着岸。貸切バスで函館キャンパスに移動し水産科学館の見学とグループ発表の準備。午後から貸切バスで白尻水産実験所に移動し講義とグループ研究発表を行う。白尻水産実験所で宿泊。

9月19日(水)：漁港見学と魚類の査定を行った後に七飯淡水実験所を経由して貸切バスで札幌へ移動し解散。

**準備学習(予習・復習)等の内容と分量：**

7月に行う予定のガイダンスでより詳細な内容を説明します。実習内容の予習やグループ作業・討論の方法を予習して下さい。特に相手に自分の考えを伝えるために必要なことを学習しておいて下さい。ガイダンス後にはグループ研究発表の資料集め等の予習が必要になります。

**成績評価の基準と方法：**

すべての日程への参加が評価の最低基準です。やむをえない事情以外は、原則受講の取り止め、途中からの参加は認められません。

グループでの行動、共同作業力、発表の内容とユニーク性、レポートなどを総合して判断します。昨年度評価分布は、秀15%、優35%、良50%、可0%、不可0%でした。

**備考：**

食事代等で6,000円の実費をガイダンス時に徴収します。学生教育研究災害傷害保険に加入していなければ、受講を認めないことがあります。はしか等の予防接種も受けていることが望まれます。「海のフィールドに出ようⅠ&Ⅱ」と「海のフィールドで試すⅠ&Ⅱ」は同じ内容です。

水産学部生へ：履修できますが船内演習の内容は一般教育演習「おしよる丸乗船実習」とほぼ同じ内容です。テキストは配布します。

## 参考資料⑧ シラバス評価のチェックポイント

- 1) 必須項目(授業の目標, 到達目標, 授業計画, 準備学習(予習・復習)等の内容と分量, 成績評価の基準と方法)をもれなく, できるだけ具体的に記述している。
- 2) 「授業の目標」(一般目標)と「到達目標」(到達目標)を明確に区別し, それぞれ(教員ではなく)学生の視点から記述している。  
「授業の目標」(一般目標)では, 授業で扱う内容の概略を, たとえば「〇〇について理解する」の形式で, できるだけ具体的に記述している。  
「到達目標」(到達目標)では, この授業で学生がどのような能力を身につけることが期待されているかを, たとえば「〇〇することができる」の形式で, できるだけ具体的に記述している。
- 3) 「到達目標」(到達目標)と「成績評価の基準と方法」とが, 密接に関連づけられている。
- 4) 「授業計画」と「準備学習(予習・復習)等の内容と分量」については, 2単位の授業科目では, 定期試験の期間を除いて, 最低でも30時間(15回)の授業時間の確保が必要とされ, また, 教室内外の学習を合わせて, 標準的に90時間の学習が必要とされていることを念頭において, 両項目を密接に関連づけ, できるだけ具体的に記述している。
- 5) 「成績評価の基準」においては, 単純に出席を点数化して加算することは厳格な成績評価を実現するうえで問題であると考えられる。その意味で, 学生が能動的に参加する授業計画を立て, 授業への積極的な参加を評価する授業設計がされている。
- 6) 部局独自の様式のシラバスでも, 「授業の目標」(一般目標)と「到達目標」(到達目標)を区別し, 「授業計画」と「準備学習(予習・復習)等の内容と分量」を関連づけて記述している。

## 参考資料⑨ 授業をよくしましょう

教育改革の最前線は、授業です。各教員が自らの授業をつねに吟味し、改善していくことは、社会の期待に応える学生を卒業させていくことに結びつきます。授業改善は、学生と教員の共同作業、調和から生まれます。

### 1) はじめに —— 講義の改善

講義は、教員というその分野の専門家が、概念、知識を整理して、学生に伝達するのに適しています。

しかし、講義は一方的伝授となり、学生との双方向性のコミュニケーションはとりにくく、教員は教えたつもり教授錯覚に陥りやすいものです。

教えたはずのものが、試験をしてみると、全体的に成績が悪い、半数近くも不合格というのでは、教員が学生に対応しきれていないといわざるをえません。

### 2) 講義、授業の事前の準備

#### (1) シラバス

授業改善の第一歩は、授業を事前に周到に設計することです。

つぎのことを意識する必要があります。ご承知のように、現在進行しています大学評価はその大学の理念、目標を実現するために、具体的にどうしているかが問われます。教育の最前線である授業も、大学、学部等、組織のなかでの役割を踏まえる必要があります。

「あなたの授業はどうして必要なのですか？」

「あなたの授業は大学、あるいは学部でどんな教育的役割を担うのですか？」

「あなたの授業と他の科目との関係は何ですか？」

「学生に何を学んでほしいのですか？何のためですか？」

「与えられた回数の授業を受けることで、学生が何を身につけたといえるようになるのですか？」

- ①授業設計では、学生が何をどの程度(どこまで)身につけたといえるようにするかを明確にします。大学・学部の理念・目標と関連して明確にします。これにより、授業の方法、評価の基準も明確になります。
- ②授業科目は、その大学、その学部での必要性から立案、授業実施されるものです。大学・学部の理念にそって授業は周到に計画されていなければなりません。
- ③シラバスには、その科目の理念・目的、到達目標(ゴール)、授業の展開(各回の授業内容)、評価方法を明示します。これにより、授業は体系的に、計画的に展開されます。
- ④学生が、事前に内容を把握し、予習、学習計画が立てられるようにします。
- ⑤授業はシラバスにそって体系的に展開します。
- ⑥シラバスは、一般には各学部の他の授業との関係で、一冊にまとめて印刷されるべきです。
- ⑦シラバスは毎年修正されるはずであり、授業のはじめに授業日程や担当教員をいれた形で学生に配布します。

#### (2) プリント、パワーポイントなど

これらのメディアは、授業をわかりやすくするものとして、用意します。

授業時間の不足を補う、または、授業時間を節約するために用いるものではありません。

#### (3) 各授業の進行計画

事前に、授業進行のシナリオを構成します。

この際、学生がどこまで知っているかを考慮します。授業は、学生の知っているレベルから入らなければ、学生はついてくることはできません。

クラスにいろいろなレベル、多様な学生がいることを考慮します。とくに、大衆化大学となっている現状では、入学させた以上は適切な教育により、付加価値をつけて卒業させる義務と責任があります。

教員は、学生がついてこられることを確認しながら、大学レベルの教育環境を提供し、学生の学習を適切にガイドしなければなりません。

### 3) 講義, 授業

#### (1) 時間

- ①授業を時間どおりに開始します。
- ②授業の終わりには質疑の時間をとれるようにします。
- ③最後に個別の質疑に答えられるように、時間的に余裕をもつのがよい。

#### (2) 進行

- ①はじめに授業全体を紹介し、順序よく、体系的に進めます。
- ②はじめに目標、背景を明確にします。
- ③本論を明確にし、よく準備されたことが伝わるようにします。
- ④体系的に進行します。
- ⑤重要な点は繰り返すか、言い方を変えて説明します。
- ⑥できるだけ、具体的に、リアルに紹介、説明します。
- ⑦最後に、全体をまとめ、重要な点が何かわかるようにします。

#### (3) 話し方

- ①大きな声で、腹からの発声で、はぎれよく話します。
- ②一番後ろの学生にも話しかけるように発声します。
- ③大きな講堂はマイクを使う。
- ④間の取り方、強調、抑揚に気をつけます（何が重要かが伝わるように話す）。
- ⑤ややオーバーな抑揚もよい。
- ⑥速すぎない話し方をします（200字原稿用紙2枚で3分ほど）。
- ⑦ノートのとれる速さの話し方をします。
- ⑧助詞、語尾も明確に発音します。
- ⑨アー、オー、を避けます。
- ⑩聞き取りやすい発声、発音をします。
- ⑪アイコンタクトをしながら話します。

#### (4) 話しの内容

- ①少しのユーモアはよいが、過度のユーモア、駄洒落は嫌われるので気をつけます。
- ②学生を馬鹿にするとか、他の教員の悪口は嫌われるので気をつけます。
- ③略語はできるだけ使わない。
- ④聴衆の理解できる言葉で話します（専門用語に気をつけます）。
- ⑤内容を具体的に、現実的に、学生の身近な問題として述べます。
- ⑥抽象的内容も具体的に丁寧にわかりやすく話します。
- ⑦内容を、発想、背景、今日的発展性、社会性で現実的に述べます。
- ⑧他との関連性についてもふれます。
- ⑨現実的研究課題とも関連させます。

#### (5) 板書

- ①大きな文字で、色濃く書く。
- ②適正な色づかいをする。
- ③楷書で書く。
- ④横文字はできるだけブロック体で書く（筆記体は読めない）。
- ⑤横文字は、できたらプリントを用意する。
- ⑥黒板に整理して、体系的に書く。
- ⑦番号は順次性がわかるように体系的につける。
- ⑧ノートがとれる速さ、横書きで書く。
- ⑨消すときも速すぎないようにする。
- ⑩書きながら、早口で説明しない。
- ⑪図、模式図、グラフも理解の速さで描き、説明する。

#### (6) 視聴覚メディア

近年は、電子情報メディアによる教材が発達してきました。また、学生もテレビ、映画、コンピュータなど映像情報の時代に育っています。授業では、OHP、スライド、ビデオ、マルチメディア（CD-ROM、インターネット）の特質を熟知した効果的活用が勧められます。これを上手に利用する授業の評価はよくなります。

- ①画像、動画は情報量がさきわめて多い。伝えたい情報量、伝達の速さを顧慮した注意深い利用が必要となる。
- ②記憶しなければならない語句はメディアでは十分に伝えられないので、プリントを用意する。
- ③板書のかわりにメディアのみを使うことは避けた方がよい。
- ④メディアはあるリアリティを伝えるものとして有効である（特にビデオ、写真）
- ⑤文字は、後ろからでも充分見える大きさとで用意する。

#### (7) 態度

- ①教員の熱意が伝わるようにする。
- ②専門の研究内容も紹介し、わからないものはわからないと伝える。
- ③余裕のある態度で進行する。
- ④専門家としての自信をもって対応する。
- ⑤クラスに貢献する学生をほめよ。
- ⑥詰め込みすぎにならない量で、丁寧かつ紳士的な授業を展開する。

#### (8) 難易度

- ①学生が知っているレベルからはじめる。
- ②内容を学生の一般的知識に関連させながら授業をする。
- ③学生の理解の速度にあわせて進める。
- ④教師中心にならず、学生が何を身につけてほしいのかを明確にして、進行する。
- ⑤学生が理解しているかどうかを常に鋭敏にモニターしながら話す。

#### (9) 双方向性

- ①学生の名前を覚えて使う（学生に名前でも質問する。質問があったら、名前で指名する）。
- ②学生の発言をうながす。
- ③学生の発言を歓迎する。
- ④学生の発言、意見、質問を注意深く聴く。
- ⑤学生の質問には丁寧に答える。
- ⑥学生の意見には建設的に対応する。
- ⑦学生の個々に紳士的に対応する。
- ⑧学生が理解しているかどうかを鋭敏に感じとり、対応する。
- ⑨さらに情報を求める学生に適切に対応する。

#### (10) 試験

不合格者が多い、あるいは成績が悪いものが多い場合には、教え方に問題があることを疑うべきです。

#### (11) 新技術

e-ラーニングシステム、講義画像の配信、クリッカーなどの教育用新技術が導入されつつあります。高等教育開発研究部ではいずれも試験的に運用しています。

e-ラーニングシステム：科目ごとにホームページを持ち、メール、掲示板、ファイルのダウンロードなどが利用できる。

クリッカー：学生に0-9までの数字キーを持ったリモコンを配布し、講義中にクイズの解答や、講義の感想などを瞬時に集計するシステム。

## 4) 学生による授業のチェックリスト

(Diagnostic Elements of Teaching (DET) Questionnaire)



この講義と先生について、それぞれの文で、そう思うか (A), 思わない (D) か、あなたの意見を記入して下さい。

- \_\_\_ 1. 先生はよく準備している。
- \_\_\_ 2. この講義は刺激的である。
- \_\_\_ 3. 講義全体の枠組みは適切である。
- \_\_\_ 4. 私は何を勉強すべきか明確にわかる。
- \_\_\_ 5. 私は私の出したレポートや試験の答案がどのように評価されるかわかる。
- \_\_\_ 6. 先生は必要以上に物事を複雑にする。
- \_\_\_ 7. 先生は十分な頻度で小休止（考える時間）を入れない。
- \_\_\_ 8. この講義は時々考えさせるしきみをもっている。
- \_\_\_ 9. 先生はシラバスでの枠組みに沿っている。
- \_\_\_ 10. 先生は講義の資料を興味深いものにしてくれる。
- \_\_\_ 11. この講義の資料は価値があり重要である。
- \_\_\_ 12. この講義では、先生の言うことをすべて書き留めなければいけないと思う。
- \_\_\_ 13. AV 機器など情報機器が効果的に使われている。
- \_\_\_ 14. 講義の資料全体の量は毎回適切である。
- \_\_\_ 15. 先生は学生とアイコンタクトをうまく使っている。
- \_\_\_ 16. 先生の声はよく聞こえ明瞭である。
- \_\_\_ 17. この講義で質問したり意見を言ったりすることは難しい。
- \_\_\_ 18. 私はたくさんこのことをこの講義から学んでいる。
- \_\_\_ 19. 宿題やテストは適切な期間内に返されている。
- \_\_\_ 20. 先生の示す具体例、応用例は少なすぎる。
- \_\_\_ 21. 講義にもっと議論があれば学習の助けになると思う。
- \_\_\_ 22. 講義はよく整理されている。
- \_\_\_ 23. 先生は質問に適切に答えてくれる。
- \_\_\_ 24. 宿題やテストは適切なコメントがつけられて返されている。
- \_\_\_ 25. どの講義資料が重要かはすぐわかる。
- \_\_\_ 26. 先生の講義スタイルは私の注意を引いている。
- \_\_\_ 27. 先生は講義の時間を上手に使っている。
- \_\_\_ 28. 時々講義がどこへ向かうかわからず混乱することがある。
- \_\_\_ 29. 先生は学生への質問を上手に使っている。
- \_\_\_ 30. 指示された読み物や与えられた資料は適切である。
- \_\_\_ 31. 勉強しやすい雰囲気を維持している。
- \_\_\_ 32. 講義時間外でも先生は助けてくれる。
- \_\_\_ 33. 先生は学生に敬意を持って接してくれる。
- \_\_\_ 34. 宿題やテストに対する評価は公平である。
- \_\_\_ 35. この教室は学習するために十分な広さである。

(カナダ・ダルハウジー大学版を翻訳)

平成19年度後期から、授業アンケートの裏面で、授業について、「良かったと思う点」「改善した方がよいと思う点」「その他、気づいたこと」の3点に分けて学生に自由意見を記入してもらっています。

- 「良かったと思う点」に関する自由意見の一部は、「授業アンケートによるエクセレント・ティーチャーズ」の授業紹介の中で公開されています。
- 「改善した方がよいと思う点」に関する自由意見は、担当教員に通知されるだけでしたが、授業の基本的な側面に関する要望が多数見られるため、平成21年度授業アンケート報告書では、注意を喚起する意味で、次の表のようにまとめました。

### 自由意見「改善した方が方がよいと思う点」に多く見られる回答

#### (1) 教員の説明の仕方について

- ・声が小さい、後ろまで聞こえない
- ・話が聞きづらい
- ・早口

#### (2) 授業の進め方について

- ・時間配分を考えて欲しい（後半になると授業のスピードが速くなったり、その都度スピードが違ったりする。）
- ・授業の開始が遅れる、延長が多い
- ・専門用語や定義、新しい用語・単語、高校の知識では足りない部分について詳しく説明してほしい
- ・騒がしい学生には注意してほしい
- ・小テストやレポートの解答がほしい

#### (3) 黒板の使い方について

- ・文字が小さい、薄い、雑、汚い
- ・読みづらい
- ・板書が早い
- ・板書をすぐに消す（ノートに書ききれない）
- ・黒板の下まで書かれると見えない

#### (4) パワーポイント等のAV機器の使用について

- ・スライド1枚の情報量、文字数が多い（ノートに書ききれない）
- ・スライドが見にくい（明かりを消す、カーテンを閉める等工夫が必要、全て明かりを消すと見づらいとの意見もあり）
- ・スライドを切り替えるスピードが速すぎる
- ・文字が小さくて読みにくい
- ・文字や背景の色によっては見づらい
- ・ポインターが見づらい

## 参考資料⑩ クリッカー

大学では「クリッカー」と呼ばれる機器を利用して、授業の活性化に成功している教員がたくさんいます。クリッカーとは、学生一人ひとりに専用のリモコンを配り、先生が授業中に出题したクイズに学生が回答することができるシステムです。回答分布は即座に集計され、ボタン一つでスクリーンに表示されます。授業に対する学生の集中度・満足度を上げるのは大変ですが、クリッカーを使うことで比較的容易に授業改善が可能です。たとえば、以下のような効果があります。

- ・ 学生参加型の授業
- ・ 学生の理解度をリアルタイムで把握
- ・ 学生がクラス全体の理解度を把握
- ・ 休憩の役割
- ・ 記憶定着率の向上
- ・ 出席調査の自動化
- ・ 居眠り防止
- ・ アンケート

特に、大人数のクラスでも、講義という形態を維持しつつ、学生が能動的に授業へ参加できるようになるところが高く評価されています。それは、教育先進国であるアメリカで、毎年数百万台のペースで売れ続けていることからもうかがえます。北大では、2007年4月に日本の高等教育機関では初めてクリッカーを導入し、基礎物理学等の授業で使用してきました。その後全国の大学でも急速に普及しつつあります。

(このワークショップでは、KEEPAD JAPAN社の無線式クリッカーを使用しています。)

### 1) 学生としてのクリッカー使用法

学生一人ひとりにクリッカーが配られます。PowerPointの slides が、クイズ画面になったら投票受付開始です。投票終了に向けて10秒のカウントダウンを入れることができ、ゼロになったら受付終了です。無線式ですので、クリッカーの位置や向きは気にする必要はありません。信号の受付ミスはほとんどありませんが、ボタンをしっかりと押さずに未投票になってしまう場合があります。また、電池が切れており、投票されない場合があります。しかし、自分の投票が成績に反映される場合もありますから、学生側で受理されたかどうかを確認する必要があります。クリッカーは、受信が正常に行われると緑色にランプが光ります。投票時にはランプを確認しながらボタンを押します。また、電池が切れていたら即座に教員やTAに伝えます。



このクリッカーでは、投票受付中は何回でも押し直しができます。後で押した番号が回答として上書き保存されます。

クリッカーはリモコン一つひとつに異なるIDが割り当てられており、すべてが異なるリモコンです。もし教員が、クリッカーの投票を成績に反映させている場合、クリッカーは個別に各学生に割り当てられています。学生は、毎回同じ番号のクリッカーを受け取る必要があります。

### 2) 北大での利用について

北大では、いくつかの学部で、既にクリッカーを購入して使用しています。また、所属学部でクリッカーを所有していない場合にも、希望教員が使用できるように、全学教育科目を対象として貸出しを行っています。現在、最大で360個のリモコンが貸出し可能です。詳しくは、高等教育開発研究部のホームページをご覧ください。(http://socy.hokudai.ac.jp)



## 参考資料⑫ ELMS

北大には情報基盤センターにより「ELMS」という高機能な学習管理システムが提供されています。北大の1年生は全員「情報学Ⅰ」を履修し、毎週 ELMS 上で作業・宿題の提出を行っており、学生は ELMS に慣れていきます。近年ではファイルでのレポート提出は一般的になりつつあり、教員は管理者として ELMS を操作することになるかもしれません。最近では、学生に課したレポートにおいて Web からのコピーがみられるようになっていきます。教行を Google で検索すると出典元が判明する場合がありますので、ぜひファイルでの提出に移行しましょう。

このワークショップの参加者には ELMS での小テストやレポートファイルの提出を疑似的に体験してもらうために、ELMS 内でアンケートの回答・顔写真ファイルの提出を行ってもらいました。ログインして気がついた方もいると思いますが、すでに担当授業のグループ一覧が並んでいると思います。すぐに利用できますので、今度は教員権限としての利用を行ってみましょう。

ELMS では、教育現場で役に立つ以下のような機能を利用できます。

- ・お知らせの表示
  - ・メーリングリスト
  - ・ファイルの共有
  - ・掲示板
  - ・アンケート調査
  - ・課題ファイルの受け取り
  - ・自動採点付き小テスト
  - ・学生間ピアレビュー
- など

特に、単位の実質化のため、学生の授業外学習を促進する、掲示板での討論、自動採点付き小テスト、学生間ピアレビューは有効であると思われます。詳しくは、下記 URL の「ELMS の利用について」をご覧ください。  
<http://www.ec.hokudai.ac.jp/docs/>

# Welcome to ELMS

## Education and Learning Management System

北海道大学情報基盤センター

高度情報化社会・高度知識社会を迎え、教育の情報化が国策として推進され、高等教育に相応しい教育・学習に必要な情報環境の整備が求められております。

情報基盤センターの教育情報システム ELMS は、本学における情報教育の高度化及び教育の情報化に必要な情報基盤として、本学における教育・学習活動に対し、インターネット利用、ソフトウェア利用、グループ学習等のための情報環境を提供しております。

現在、本学の学部学生はほぼ全員が利用登録をしております（2007年度からは、入学時に、全員登録し、電子メールアドレスを付与しております）。全学教育共通科目「情報学Ⅰ」（履修率約98%）では、ELMSを利用して一般情報教育を行っております。

ELMSポータル

ID&パスワード

ELMS World

お知らせ (情報対応)  
掲示板  
無線LAN  
プリントステーション  
遠隔教育支援  
CNNニュース  
ChatOffice

個人サービス  
・PCソフトウェア利用  
・電子メール利用 (申請)  
・UNIXソフトウェア利用 (申請)  
.....

グループ参加  
・グループ開設 (申請)\*

グループポータル

グループ

グループはグループIDで区別

※ELMSポータルサイトには、原則、いつでも、どこからでもアクセスできます。  
※利用には条件がありますので、詳しくは、お問い合わせ下さい。

※グループの開設は教員等に限定されています。

※教育情報システムでは、1200台のクライアントコンピュータが、学部等に、分散配置されています。

「グループ」サービス

- ・ファイルの共有、動画配信
- ・コンピュータ菓子約
- ・お知らせ (情報対応)
- ・Q&A
- ・掲示板とブログ
- ・課題管理 (提示と評価)
- .....